



彼女と付き合い始めて、もう数週間になる。

とんでもない出会いだったためか、うまくいくのか不安な部分があった。でも彼女は見た目通りの常識人で、むしろ出会った時なんて俺にあんなことをしたのか不思議なくらいだ。

彼女との半同棲のような生活は穏やかそのもので、俺は玄関のドアを開けるたびに心からホッとしている。

ただ、今日は少し事情が違う――

玄関のドアを閉め、鍵をかける間も職場でのやりとりが頭の中をぐるぐると駆け巡っていた。

「まったく……」

自然とため息がこぼれる。靴を脱ぎながら、今日のことを思い出す――

「この仕事は君に頼んでいたはずですが？ 終わっていない理由はありますか」

わかりやすいほど不貞腐れた顔をした部下へ、俺は尋ねる。

この男は常に『どれだけ作業を端折れるか』ばかりを追求し、作業の時間を短くしようとしていた。よく言えば合理的、悪く言えば横着者だと俺は評価している。

そんな彼は、またしても頼んでいた仕事をすっぽかし、書類作成をしていたと発覚したのだ。今までは特にとがめることはなかったが、今回はさすがに見逃すわけにいかない。

「理由があるのですか？」

もう一度同じことを尋ねる。



わかってはいる、どうせ理由などないことを。大方、やりたくないからやらなかった、という具合だろう。

しかし部下は、自分は間違っていないという目をしたままこちらを睨みつけた。

「してもしなくても変わらないと思ったからやらなかったんですよ！ 大体、ルールだ規律だって。ルールを妄信するのはよくないことではないでしょうか？ 看守長は頭で考えることを放棄しているように見えます！」

言葉が出なかった。まさか、部下の目から考えることを放棄しているように見えていたとは。

そして瞬時に言い返せなかった自分にも腹が立ったし悲しかった。

そのあと、横でたまたま見ていた別の同期が、顔を真っ赤にして部下を叱責してくれたのだが……それでも俺の気持ちも頭もずっとモヤモヤと霧がかかりっぱなしだ。

『看守長は頭で考えることを放棄しているように見えます』

俺はルールを守ることは大切だと信じてきた。でも、それは果たして考えることの放棄なのだろうか？

結局仕事でも答えが出せないまま、帰宅することになったのだった。

俺の足音を聞きつけ、彼女がキッチンから出てくる。

「おかえりなさい、早上がりだったから、今日はご飯作ってみたの。よかったら食べて」
幸せそうな笑顔を見て、張り詰めていた気持ちがほぐれていくよだった。



「ありがとう、嬉しいよ。今まではコンビニ飯しか食べなかつたから」

手を洗ってから、席に着いて温かな夕食を食べ始める。彼女が作ってくれた生姜焼きは疲れた体と頭にガツンと響いて、自然と食べる手が早くなつていく。

「ん、すごく美味しいよ……ありがとう」

せっかくこんなにも美味しい食事があるんだから、今日の昼間のことは頭の片隅にでも片づけておくべきだろう。風呂に入った時にでも、じっくり考えよう……そう思っていたのだが。

「なんだか浮かない顔してる。味付け変だった？」

気づくと彼女が心配そうな顔で覗き込んでいた。

「えっ!」

「美味しくなさそうだったから……ごめん、タレに漬ける時間短かつたからかな。あ、残しておいていいよ? すぐ別の物を——」

「ち、違うんだ。料理は本当に美味しい。嘘じゃない」

立ち上がるとする彼女を止め、必死に説明する。料理を仕事にしている彼女に対し、上の空で食事するのがどれほど失礼なことか今更ながら実感する。

このまま適当に濁してもいいが、彼女に嫌な思いはさせたくない。俺は箸を置き、一旦食事する手を止めた。

「本当にごめん……違うんだ。ちょっとだけ聞いてくれるかな?」

俺は戸惑う彼女を見ながら身を乗り出す。



今日の部下とのやりとりを手短に説明し、ルールを守ることの是非を彼女に尋ねてみた。

本当は、こんなことを彼女に投げること自体間違っているだろう。部下の言う通り、俺は考えることを放棄しているのかもしれない。自分が悩んで考えるべきことだ、なのに――

「ルールは必要だからあるんじゃないの？」

彼女の軽い言い方に、はっとして顔を上げる。彼女は「作られた理由だってあるはずだし」とキョトンとした顔で首をかしげていた。

単に答えが出てしまった、のだろうか……？

彼女は「難しいことはわからないけど」と前置きをしたあと、俺をじっと見つめる。

「もちろんいらぬものなら撤廃するべきだけど。どうなんだろう？」

「あ、いや……今回の件に関しては、俺は必要なことだと思うよ。一人がやらないことで、次の担当者が大変になるわけだし」

やらなければならぬことの後回しというのは、積みも積もった埃を誰が掃除をするのか、という問題と似ている気がする。一日くらい掃除をしなくても見た目は大きく変わらない。でもそれが三日、一週間と続けば汚れは目立つ。でも前の担当者がやっていないのに、なぜ自分がやらなければならぬのか……そう考えるのは当然だ。だからこそ『やるべきだ』というルールが必要とされている。それは、みんなが守ってこそできあがる秩序のためのルール。それは言いかえれば社会のシステムだ。

「俺たちは受刑者の手本でいなきゃいけない」



やらなければならぬことを押し付け合う姿を、見せてはいけなと思っています。受刑者は一度は道を誤ったが、今度こそ社会に出て周りや自分を大切にす道歩いてほしい。せめて刑務所内にいるうちは、社会のシステムや人同士の繋がりを知ってもらいたかった。

俺の真剣な顔を見た彼女は、にっこりと微笑む。

「なら崇敬は間違ってないよ。守るべき理由を説明したらいいんじゃない？」

ああ、そうか……と俺はテーブルの下で両手を握りしめる。俺はずっと「ルールは守るべきもの、その理由は……」という順序で考えてきた。しかし彼女は「この幸せを得るための決まりごとを守ろう」と考えているのだろう。

よく似ているようでいて、考え方は全然違う。彼女の目から、世界がどんなふうに見えるのか猛烈に気になった。

「うん、そうだな……話してみるよ。ありがとう」

彼女は出会った時も「ルールは守るためがあるが、破っても問題ない場合もある。それはみんなが幸せになるケースだ」と話していた。彼女は俺よりずっと聡明で柔軟だ。

ルールは押し付けるものではなく、共に生きるために守るべきもの……胸に刻むべきかもしれない。

「あ、ちょっとだけスッキリした顔になったね」

「はは、君には隠し事ができないな」

苦笑いしながら箸を持つ。彼女の作ってくれた美味しい食事を食べながら、今度こそ幸せな顔

でこれからの話をしようと思った。

